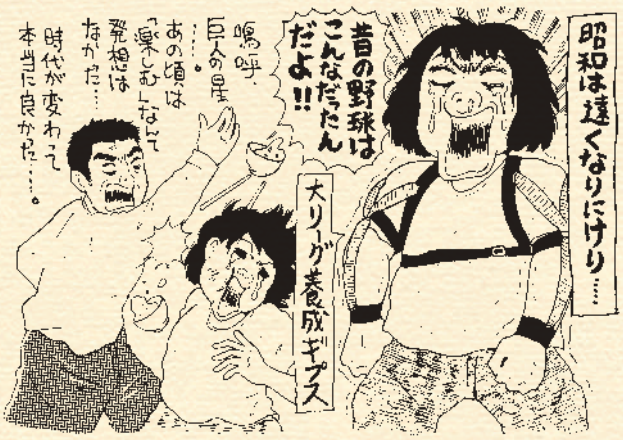
はえぬきど真ん中

ベースボールの魅力を再発見



ここ数十年、野球を観なくなった。野球が大好きだった私は、高校時代は野球部のマネージャーになり、部室の整備や交流試合のセッティング、試合ではスコアブックを担当した。決して強いチームではなかったが、スコアブックをつけながら、相手ピッチャーの球種（ストレート、カーブなど）や配球のくせ、決め球などを見分けるのがとても楽しかった。

そういえば、主人との初デートは神宮球場での巨人対ヤクルトの試合だった。それが子育てや仕事に追われ、とんと野球から遠ざかってしまった。しかし、WBC（World Baseball Classic）での侍ジャパンの試合を観て、改めて野球のすばらしさを思い出した。

メンバーは、メジャーリーガーや日本プロ野球界を代表する30人。誰もが自分がチームを引っ張る主力打者や投手たちだが、試合に勝つ1勝の重みをかみしめて、自分の役割に徹している姿が目に焼き付いた。大谷選手がしたバントは、まさにその象徴だった。それが私の好きな野球の姿だったのだ。4番打者だけが重要なのでなく、1番からの打順にはそれぞれ役割があり、グラウンドの9人はもとより、ベンチ組も代打や代走をいつでもこなせる準備をする。全員野球の楽しさを久しぶりに味わった。

そして、何よりも選手が声を出し、笑顔を見せ、全身で闘志をむき出しにしてパフォーマンスをする姿は、日本の野球では見られない光景だった。まだまだあきらめないぞ、勝つぞとの思いが伝わってきた。オリンピックでも「楽しんでやりたい」と選手の発言を聞く機会が多くあったが、『楽しむ』との言葉の意味を初めて理解できた。

これからは、私なりに楽しんで仕事をしたいと思う。

文：山橋由貴子［やまはしゆきこ］（公社）「小さな親切」運動本部専務理事兼事務局長　イラスト：安彦麻理絵［あびこまりえ］

「心のワクチン」運動

「私の心のワクチン」エピソードを募集

コロナ禍の3年、中央本部が主催する二つのコンクールの応募作品には、未知の感染症への恐れ、通常の生活が送れない不安や焦りが多く綴られた一方、家族や身近な人とのつながりに目を向けた作品も増えました。

今年度は、共通の特別テーマ「私の心のワクチン」を設け、自分にとってコロナ禍とは何だったのか、それぞれが感じた想いやエピソードを募集します。

第48回 作文コンクール

対　　象：**小中学生**（小中学生と同じ学齢のものを含む）
テ ー マ：❶「小さな親切」
　　❷私の心のワクチン
締め切り：**2023年9月22日（金）必着**
入賞発表：**2023年11月中旬**

第39回 こころのエッセイコンテスト［はがきキャンペーン］

対　　象：**子どもから大人まで**
テ ー マ：❶心から伝えたいありがとう
　　❷私の心のワクチン
締め切り：**2023年9月4日（月）必着**
入賞発表：**2023年11月上旬**

両コンクールの入賞者は、2023年11月24日（金）開催の全国表彰式席上で表彰いたします。
応募要項の詳細は「小さな親切」運動WEBサイト（https://www.kindness.jp/）をご確認ください。